慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会保障と係わる経済学の系譜(1)
Sub Title	An explanation to family tree of economics related to social security policy(1)
Author	権丈, 善一(Kenjo, Yoshikazu)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2013
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.55, No.6 (2013. 2) ,p.45- 65
JaLC DOI	
Abstract	前稿「社会保障と係わる経済学の系譜序説」で, 社会保障と係わる経済学の系譜を作る試みの第一歩として, 過去, 相当に長い間, 世界的にも経済学の標準的テキストとされてきたサムエルソンの『経済学』に描かれた「経済学の系統図」を検討した。本稿では, 「序説」で示した「社会保障と係わる経済学の系譜」を, 経済学の歴史を遡りながら説明する。
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20130200-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第55巻第６号
2013 年 2 月

2013年１月24日掲載承認

社会保障と係わる経済学の系譜（１）

権　丈　善　一

＜要　　約＞
前稿「社会保障と係わる経済学の系譜序説」で，社会保障と係わる経済学の系譜を作る試みの第一歩として，過去，相当に長い間，世界的にも経済学の標準的テキストとされてきたサムエルソンの『経済学』に描かれた「経済学の系統図」を検討した。本稿では，「序説」で示した「社会保障と係わる経済学の系譜」を，経済学の歴史を遡りながら説明する。

＜キーワード＞
社会保障，経済学の系譜，合成の誤謬，過少消費論，所得再分配

はじめに

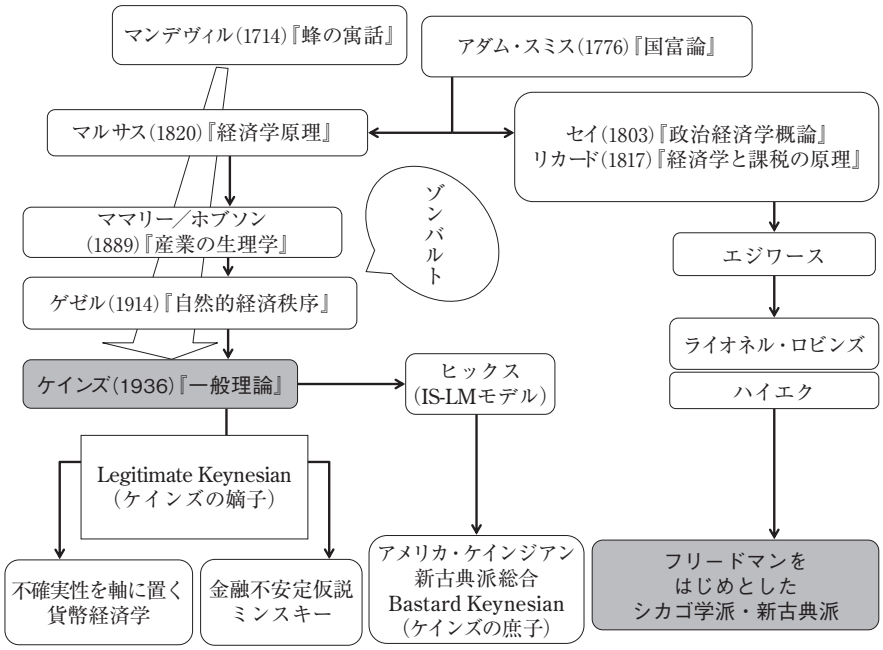
「社会保障と係わる経済学の系譜序説」は，次の文章で終えている。

> サムエルソンの経済学の系統図，私が図表５で示した経済学の系譜の中で，経済学が右と左に分かれるリカードとマルサスの間の分岐は，スミスの資本蓄積に関する考えのマルサスによる批判という形であらわれることになる。
>
> ただし，1800年代の初頭に経済学がセイの法則を信奉する右側と，セイの法則を否定する左側に分岐する伏線は，1700年代のはじめに出てきたマンデヴィル，その論をスミスがどのように受け止めたかに源をみることができるのであり，次ではマンデヴィルから説明を始めることにしよう。

文中の図表５とは，次頁の図表１である。

前稿「序説」でも述べたように，図表１の左側の系譜は，主に，ケインズの『雇用，利子および貨幣の一般理論』の第23章「重商主義，高利禁止法，スタンプ付き貨幣および過少消費論に関する覚書」に基づいている。この経済学の系譜の説明を，マンデヴィルからはじめよう。

図表 1　社会保障と係わる経済学の系譜



マンデヴィルとスミス

オランダ系イギリスの医師兼文人バーナード・マンデヴィルの誕生は1670年であり，希代の風刺家であったスウィフト誕生1667年の３年後のことである。スウィフトの『桶物語』は1704年，『ガリヴァー旅行記』は1724年刊であり，マンデヴィルやスウィフトが世を賑わせていたのは，イギリスで風刺文化が全盛であった18世紀前半の啓蒙時代の最中であった。[1)]

マンデヴィルの『蜂の寓話』の紹介は，上田辰之助氏の味わい深い文章からはじめよう。

> ゆえあってか名を秘めた一作者の筆になる四ッ折本26頁，売価半ペニーの歪詩（ドツガレル）『ブンブン不平を鳴らす蜂の巣，またの題名「悪漢化して正直者となる」』がロンドンで発売された

1)　ちなみに，マンデヴィルは，ベンジャミン・フランクリンが1724年に渡英した際に会っており，フランクリンの『自伝』に次の形で登場している。

「彼はまた，チープサイドのある小路にあったホーンズという見栄えのしない居酒屋へ私（19）をつれてゆき，そこで『蜜蜂物語』の著者のマンデヴィル博士（55）に私を引き合わせてくれた。マンデヴィル博士はこの居酒屋にクラブをもっており，彼自身がこのうえなくおどけた愉快な人物で，そのクラブの中心人物であったのだ。さらにライアンはバトソンのコーヒー店で，私をベンバートン博士に紹介してくれたが，そのベンバートン博士が，今度は適当なおりに，私がサー・アイザック・ニュートン（83）に会うために機会をこしらえてあげると約束するのだった。それで私はこのニュートンに会える日を楽しみにしていたが，これはついに実現せずに終わった」

Franklin（1771）／渡辺利雄訳（1980）『自伝』128頁

（　）内は，フランクリンがロンドンに滞在した1724年から1726年の中央値1725年を基準として，それぞれの生年を引いた値である〔マンデヴィルに関しては洗礼年〕。

のは1705年の春のこと，たちまち人気を呼んで，半ペニー 4ページ綴りの偽版さえあらわれ，当時の習慣にしたがって，都の街々に読売された。

1714年には同じく著者無名の単行本として再版されたが，詩篇のあとに『徳操起源論』と題する散文の補論が加わり，さらにつづいて20編から成る著者注解が載せられていた。書名は改められて『蜂の寓話，またの題「私人の悪徳・公共の利得」』となった。しかし，著者の名前が書中にはっきり記されるようになったのは1723年版以後のことで，それ以来バーナード・マンドヴィル（ママ）はイギリス文壇の名物男となった。

上田辰之助（1987〔底本（1950）〕）

『上田辰之助著作集　4　蜂の寓話――自由主義経済の根底にあるもの』5－6頁

マンデヴィルの文章は，江戸の瓦版のようにロンドンの街で読まれていたようである。『蜂の寓話』が世間から注目されるようになるのは，1714年の版に「注釈」が付され，「慈善と慈善学校についての試論」「社会の本質についての考究」「索引」が新たに書き加えられた1723年版の出版からである。この1723年版から，轟々たる勢いの非難がなされるようになり，ハイエクが評する「あれほどまでに世の顰蹙を買う離れ業をやってのけた[2)]」マンデヴィル，「道徳的激怒をよびおこした[3)]」マンデヴィルは，自著への批判に対する反論を続けていき，1729年には『蜂の寓話』の下巻にあたる第2部を出版している。著者は生前に1732年第6版まで出しており，1733年に62歳[4)]で他界しているので，50代初頭に1723年版の『蜂の寓話』を出して以降の彼の晩年は，反論，

2）Hayek（1966）／田中真晴・田中秀夫訳（1986）『市場・知識・自由』100頁

1966年3月23日にブリティッシュ・アカデミーに対して行われた「精神史上の巨匠についての講演」，“医学博士バーナード・マンデヴィル”による。

ちなみに，ハイエクによるマンデヴィル，およびマンデヴィルに対するケインズの評価に関する感想は次のようなものである。

> かれ〔マンデヴィル〕の経済学的著作の他の部分にたいしてケインズ卿ほどの権威者が大いに称賛したのだけれども，しかし私がかれにすぐれた意義を認めなければならないと主張するのはこうした理由からではない。……マンデヴィルが専門的経済学について述べなければならなかったことは，かれの時代に広く流布していたどちらかといえばありきたりの，あるいは少なくとも独創的でない思想であって，ずっと広い関連をもった概念を説明するためにかれはその思想を用いただけのように私には思われる。
>
> Hayek（1966）／田中・田中訳（1986）『市場・知識・自由』101頁

では，ハイエクが認めたマンデヴィルの意義は？

> 私がマンデヴィルのために主張したいと思うのは，かの機知の戯れに導かれてかれが辿り着いた思索は，進化と秩序の自生的形成という双生児的観念についての近代思想上の決定的な突破口を開いたということである。
>
> Hayek（1966）／田中・田中訳（1986）『市場・知識・自由』102頁

もっとも，ハイエクによれば，「マンデヴィルは何が自分のもっとも重要な発見であったのかをたぶん十分には理解していなかった」〔Hayek（1966）／田中・田中訳（1986）p.103〕，「現代の読者にしてもマンデヴィルが何を目論んでいたのかを十分に理解しているだろうか。そしてマンデヴィル自身もどこまで理解していただろうか」〔Hayek（1966）／田中・田中訳（1986）105頁〕ということであるため，ハイエクの思想的個性ゆえの，マンデヴィルへの独自性の高い評価であるのかもしれない。

3）Hayek（1966）／田中・田中訳（1986）『市場・知識・自由』106頁

4）洗礼日1670年11月20日を誕生日として計算。

反論，また反論に追われたことになる。

『蜂の寓話』は，1723年版が世に現れて間もなく，「ミドルセックス州大陪審が『蜂の寓話』をば公共の秩序を乱す不穏書として摘発するに及んで著者の評判は一層高くなり，反駁者が相ついで出現するに至った[5)]」。

マンデヴィルの著書は，当時の美徳である正直や倹約を否定し，それら普通に考えられている美徳は社会にとっては悪徳であって，通常，悪徳とみなされている詐欺や贅沢，奢侈のおかげで一国の経済社会の繁栄はもたらされると説く本であった。彼の論は，当時の，いわゆる通念（conventional wisdom[6)]）――聴衆に人気のある観念――とはかけ離れていた。

『蜂の寓話』の本体である詩篇は次のように始まる――以下，本稿で言いたいことを，マンデヴィルがほとんど言い尽くしていたことを理解してもらうために，433行に達する大詩から，主要な箇所の引用――泉谷治訳（1985）――を行っておく〔「……」は省略マーク〕。なお，上田辰之助訳（1987〔底本（1950）〕）の方がわかりやすい箇所もあるので，そこは脚注に示しておいた。

ある広々とした蜂の巣があって
奢侈と安楽に暮らす蜂でいっぱいだった
……
この虫けらどもは人間並みの生活をし
小規模ながら人間の行為とそっくりで
町で行われるあらゆることから
軍人とか学者の職務まではたしていた
……
人間の器械にも労働にも
船舶にも城塞にも武器にも細工人にも
技芸にも学術にも仕事場にも道具にも
相当するものがみなそこにあった
……
おたがいの渇望と虚栄とを
満たそうとして何百万もが努力し
他方さらに何百万もの仕事は
製作物の破損をめざすことであった
……
詐欺を知らない商売や地位はなくて
いかなる天職にも詐欺があったのだ
弁護士はいつもきまって打つ手は
不和をかもして事件をこじらせることで
……
医師は名声や富のみを重んじ
腕前や弱った患者の健康はあとまわしで
彼らの大部分が研究したのは
医術などというものではなく
厳粛に考え込んだ顔つきやのろい動作で
薬剤師に引き立てられるとか
産婆や僧侶や出産とか葬式があるときに
立ち会う人すべてに賞賛されることとか
……
天から祝福を得るため雇われた
ジュピター神信仰の数ある僧侶のなかに
博学で雄弁な者も少しはいたが
あとの何千かは激しやすく無学だった
でも怠惰や色欲や強欲や自負を
隠すことができる者はみな合格で

5）　上田（1987〔底本（1950）〕）『上田辰之助著作集　4　蜂の寓話――自由主義経済の根底にあるもの』6頁

6）　Conventional Wisdom（邦訳　通念）は，ガルブレイスが『ゆたかな社会』の中で，社会意識の惰性を示すために定義した概念であり，時代と社会によって受け入れられている思想，観念――ガルブレイス流に表現すれば「通念の試金石は人気である。通念は聴衆の賛同を得ている」〔Galbraith（1976（1st ed., 1958）／鈴木哲太郎訳（1978）『ゆたかな社会』13頁〕ということになる。

その悪名高さは仕立屋のごまかし服地や
船乗りのブランデーと並んでいた
……
戦をしいられた兵士たちは
生き残るとそれで名誉を獲得した
……
大臣たちは国王に仕えていたが
悪者よろしく詐欺をはたらいた
……
かように各部分は悪徳に満ちていたが
全部そろえばまさに天国であった。
……
これこそ国策というものであって
各部分の不平も全体ではよく治めた
ちょうど音楽のハーモニーのように
いろいろ不協和音を基調に合わせた
……
あの呪わしく意地悪く有害な悪徳で
悪の根源をなす強欲が
奴隷としてつかえた相手は放蕩であり
あの気高い罪であった。
他方で奢侈は貧乏人を百万も雇い
いとわしい自負はもう百万雇った。
羨望そのものや虚栄は
精励の召使いであった。[7)]
彼らお気に入りの愚かさは
あの奇妙でばかげた悪徳の
食べ物や家具や衣服のきまぐれで
これは商売を動かす車輪になった。

ところが蜂たちは自らの悪徳を互いに攻撃しはじめる。それがジュピターの耳に届く……

だれもが「詐欺はダメだ」とさけび
自分の詐欺は知りながら他人だと
まるでがまんしないむごさだった

主人や国王や貧乏人をごまかして
王侯のような財産を築きあげた者が
「つのる詐欺のため国家が滅びるぞ」と
なんら臆することもなく大声でさけんだ
……
いささかなりと不都合があったり
公務に差し支えがあろうものなら
「ああ，正直にさえしてもらえたら」と
悪党どもはみなずうずうしくもさけんだ
マーキュリー神は厚かましさにほほえみ
自分で好きなことをいつも非難するとは
無分別な話だという者もいた
だがジュピター神は憤りで身を震わせ
「わめく蜂の巣から詐欺を一掃する」と
ついに怒って誓うや実行した
するとたちまち詐欺はうせて
だれの心にも正直がみなぎる
……
だが，おお神よ，なんたる驚愕だ
なんと大きく急激な変化だったことか
半時間もたつと国のいたるところで
肉は１ポンドで１ペニーも下落した
偽善の仮面はかなぐり捨てられて
偉大な政治家は道化師に変わった
……
法廷はその日から静かになった

7）　このあたりは上田辰之助訳の方が分かりやすいと思う。

奢侈は百万の貧者に仕事を与え
忌まわしき鼻持ちならぬ傲慢が
もう百万人を雇うとき
羨望さえも，そして虚栄心もまた
みな産業の奉仕者である

上田（1987〔底本（1950）〕）『上田辰之助著作集　4　蜂の寓話――自由主義経済の根底にあるもの』277頁

貸し手が忘れた分までもいれて
今や借り手はすすんで借金を支払い
貸し手は支払えない者を許したからだ
……
訴訟で繁盛する者といえばただ
正直な蜂の巣の弁護士だけなので
お金がうんとある者のほかは
矢立てを小わきに立ち去った
……
さて輝かしい蜂の巣に注意し
正直と商売が一致するさまを見よ
見せかけは消えてみるみる薄れ
まったく別の顔のように思える。
莫大な金額を毎年使う
人々が絶えたのみでなく
それで暮らした大勢の者もやむなく
毎日それにならうことになったからだ。
ほかの商売に飛びつくがだめで
どこも同じく人があまっていた。

土地と家屋の値段はさがる。
テーベの場合と同じく
その壁が演奏によって建てられた
あっというほどの豪華な劇場も貸家だ。
かつてはなやかにましました守護神は
卑しい表札が扉の上につけられて
もとの気高い碑銘をあざ笑うのを
みるよりは炎にのまれて死にたかろう。
建築業はまったくだめになり
職人たちには仕事がない。
技巧でならす絵師はなく
石工や彫刻師の名も聞けない。

教訓
……
欺瞞や奢侈や自負はなければならず
そうしてこそ恩恵がうけられるのだ
……
悪徳にも同じく利益がある
いや国民が偉大になりたいばあい
ものを食べるには空腹が必要なように
悪徳は国家にとり不可欠なものだ
美徳だけで国民の生活を壮大にできない
黄金時代をよみがえらせたい者は
正直と同じようにドングリにたいしても[8]
自由にふるまわなければならない

最後の「教訓」の斜字の箇所は，ケインズも『一般理論』で引用している。そして，ケインズは，マンデヴィルの「注釈」を紹介する。

> 物語〔すなわち『蜂の寓話〕〕に続く注釈から２ヶ所引いておこう。これを読めば，上の詩が理論的基礎なしに書かれたものでないことがわかるだろう。
>
> 貯蓄と呼ばれることもあるこのつつましい節約が個々の家庭では財産を殖やす最も確かな方法であるように，同じ方法は国全体に対しても，その国が不毛の国であれ多産の国であれ，それがあまねく追求されるなら（これは実行可能だと考えられている），

8）訳文における「ドングリ」あたりの原文は，次である。

In Splendor; they, that would revive
A Golden Age, must be as free,
For Acorns, as for Honesty.

本稿で引用したのは今泉訳であるが，上田訳では，「黄金時代の復活を願う人びとは楽園の「正直」のみならず，楽園の「樫実」にも自由の襟度あらま欲し」となっている。Acorns が，どのような含意をもっているのか，今のところ私にはよく分からない。

同じ効果を発揮する，と想像する人がいる。たとえば，イギリス人がいくつかの近隣国民のように質素になれば，いまよりははるかに富裕になるだろう，というように。だがこれは誤りだと思う（＊）。

（＊）この文章を古典派の先駆けでもあるアダム・スミスの次の文章と比較せよ。「家を斉えるさいの思慮分別が，一大王国を治める場面では愚行となる。まさかこんなこと，ありうるわけもなかろう[9]」――おそらくこれは，上のマンデヴィルの一節を念頭においたものであろう。

Keynes（1936）／間宮陽介訳（2008）『一般理論』下巻157-158頁

スミスは『道徳感情論』の中で，マンデヴィルを強く批判する。その理由の一つは，マンデヴィルが，Private vices を広く捉えて，普通には，vices と呼ぶにはふさわしくないものまで含めていたからであろう。スミスによる，マンデヴィル批判は次のようになされる。

すべての公共精神，私的利害関係にたいする公共的利害関係のすべての優先は，かれ〔マンデヴィル〕によれば，たんに人類にたいする詐欺であり欺瞞なのである。そして，あれほどおおいに誇りとされ，人々のあいだにあれほどおおくの競争をひきおこす，人道的な得は，おだてが誇りと野合したことからできた子孫にすぎないのである。

Smith（1759）／水田洋訳（2003）『道徳感情論』下巻319頁

あらゆる情念を，いかなる程度においてもいかなる方向においても，まったく悪徳なものとしてえがかれていることは，マンド（ママ）ヴィル博士の本の大きな誤謬である。このようにしてかれは，すべてのものごとを虚栄としてあつかうのであり，虚栄は，他の人びとの諸感情がどうであるかに，あるいはどうであるべきかに，なんらかの依拠関係をもつのである。そしてこの詭弁を手段として，かれは，私的な諸悪徳は公共的な諸利益であるという，かれの好きな結論を確立する。

Smith（1759）／水田訳（2003）『道徳感情論』下巻328頁

スミスがマンデヴィルの論に不満を抱いたのは，マンデヴィルがわざと中世的道徳観，神学的道徳観にもとづいてパンフレット「ブンブン不平を鳴らす蜂の巣」を書いたことも原因であろう。そして，スミス自信は，self-interest を両義的な視点でながめており，これを人間の弱さの表れであるとみると同時に，この self-interest を彼が考える諸徳（sentiments）のうちの一つともみなしていたからである。したがって，マンデヴィルの論に関しては，次のような評価も行っていた。

〔マンデヴィルたちの〕諸見解は，ほとんどあらゆる点でまちがっているとはいえ，しか

9）Smith（1776）／山岡洋一訳（2007）『国富論』下巻32頁

しながら人間本性におけるいくつかの現象は，一定のやり方でみられたばあいには，一見したところでは彼らを支持するように思われる。これらが，最初はロシュフーコー公の優雅な繊細な正確さをもって，かるく素描され，あとでマンドヴィル博士の粗野でいなか風ではあるがいきいきとしてユーモアのある雄弁をもって，もっとくわしくえがかれ，彼らの学説に，不熟練者をたいへん欺きやすい真理ともっともらしさの雰囲気をあたえていたのである。

Smith（1759）／水田訳（2003）『道徳感情論』下巻316頁

そして，スミスは，マンデヴィルの私利（self-interest）が公益をもたらすという思想は受け継ぐ。マンデヴィルから受け継いだ考え方は，スミスの中では，1759年の『道徳感情論』の中で既に使われていた「見えざる手 invisible hand」[10]を経て，『国富論』における用い方にまで―― self-interest が予定調和的に公益をもたらすという考え方の中での用い方にまで――昇華していくことになる。

もっとも，各人が社会全体の利益のために努力しようと考えているわけではないし，自分の努力がどれほど社会のためになっているかを知っているわけでもない。外国の労働よりも自国の労働を支えるのを選ぶのは，自分が安全に利益をあげられるようにするためにすぎない。生産物の価値がもっとも高くなるように労働を振り向けるのは，自分の利益を増やすことをしているからにすぎない。だがそれによって，その他のおおくの場合と同じように，見えざる手（invisible hand）に導かれて，自分がまったく意図していなかった目的を達成する動きを促進することになる。そして，この目的を各人がまったく意図していないのは，社会にとって悪いことだとはかぎらない。自分の利益を追求する方が，実際にそうした意図している場合よりも効率的に，社会の利益を高められることが多いからだ。社会のために事業を行っている人が実際に多いに社会の役に立った話は，いまだかつて聞いたことがない。

Smith（1776）／山岡洋一訳（2007）『国富論』下巻31-32頁

このように，スミスは，マンデヴィルの考え方の重要な側面を受け継いではいる。しかしながら，他方，貯蓄や節約が国民経済に与える影響については，マンデヴィルとスミスは意見を異にし続けた。『国富論』の中でのスミスの重要な命題は，次であろう。

10） Smith（1759）／水田洋訳（2003）『道徳感情論』下巻24頁に「かれは，見えない手に導かれて（led by an invisible hand）」の使用例がある。訳者である水田の注によれば，

スミスは「見えない手」という表現を，このほかに２度使っている。最初は本書〔『道徳感情論』〕より早い青年期の著作（『哲学論文集』のなかの「天文学史」）において，自然現象の背後にあるものとして古代人が考えた「ユピテルの見えない手」であり，最後は，『国富論』において，経済活動における個人の意図と社会的結集とのくいちがいの説明としてである。

Smith（1759）／水田訳（2003）『道徳感情論』下巻25頁

浪費家はみな社会の敵であり，倹約家はみな社会の恩人である。

Smith（1776）／山岡訳（2007）『国富論』上巻349頁

この論は，どのようなロジックで導き出されるのか。

スミスは，国富を，『国富論』冒頭で次のように定義する。

どの国でも，その国の国民が年間に行う労働こそが，生活の必需品（necessaries）として，生活を豊かにする利便品（conveniences）として，国民が年間に消費するもののすべてを生み出す源泉である。消費する必需品と利便品はみな，国内の労働による直接の生産物か，そうした生産物を使って外国から購入したものである。

Smith（1776）／山岡訳（2007）『国富論』上巻１頁

この，必需品と利便品からなる国富は，生産的労働（productive labour）から生み出され，そうでない労働は非生産的労働（unproductive labour）と定義される。

労働には，対象物の価値を高めるものと，そのような効果がないものとがある。前者は価値を生み出すので，生産的労働と呼べるだろう。後者は非生産的労働と呼べるだろう。

Smith（1776）／山岡訳（2007）『国富論』上巻338頁

スミスにとっての非生産的労働は，具体的には次のようにイメージされる。

国王や，国王に仕える裁判官と軍人，陸軍と海軍の将兵の労働はすべて非生産的である。全員が社会の使用人であり，他人の労働による年間生産物の一部によって維持されている。……これ〔軍人〕と同じ種類には，とくに権威がある重要な職業と，とくに地位が低い職業がどちらも入る。一方には，聖職者，法律家，医者，各種の文人があり，もう一方には役者，芸人，音楽家，オペラ歌手，バレエ・ダンサーなどがある。これらのなかでとくに地位が低い職業の労働にも価値があり，すべての種類の労働の価値を決めているのと同じ原理によって価値が決まる。

これらのなかで特に地位が高くとくに役立つ職業の労働も，後に同じ量の労働を購入できる商品は何も生み出さない。役者の朗読，弁士の熱弁，音楽家の演奏がそうであるように，これらの職業では仕事の成果が，生み出された瞬間に消える。

生産的労働者も非生産的労働者も，さらにはまったく労働しない人も，すべてその国の土地と労働の年間生産物で維持されていることに変わりはない。年間生産物はどれほど多くても無限ではなく，かならず限界がある。このため，ある年の生産物のうち，非生産的労働者の維持に使われる部分が少ないほど，生産的労働者の維持に使われる部分が多くなり，翌年の生産物の量が多くなる。逆に，非生産的労働者の維持に使われる部分が多いほ

ど，生産的労働者の維持に使われる部分が少なくなり，翌年の生産物の量が少なくなる。

Smith（1776）／山岡訳（2007）『国富論』上巻339頁

今日のようにサービス産業をはじめとした各種経済活動の付加価値のすべてを国民経済計算の基礎に置くわれわれからみれば，スミスの非生産的労働のイメージには，違和感がある。しかし，そうした，われわれのイメージとは異なる国富の認識に基づいて，スミスの成長論，すなわち資本蓄積論は展開されていく。

スミスの資本蓄積論をうまくまとめた堂目氏の図式を，図表２に紹介しておこう。

堂目氏の図式は，次の文章をうまく要約している。

個人の資本は，年間の収入，年間の利益のうち貯蓄にあてた額しか増加せず，社会の資本は，社会を構成する個人の資本の合計だから，同じ方法でしか増加しない。

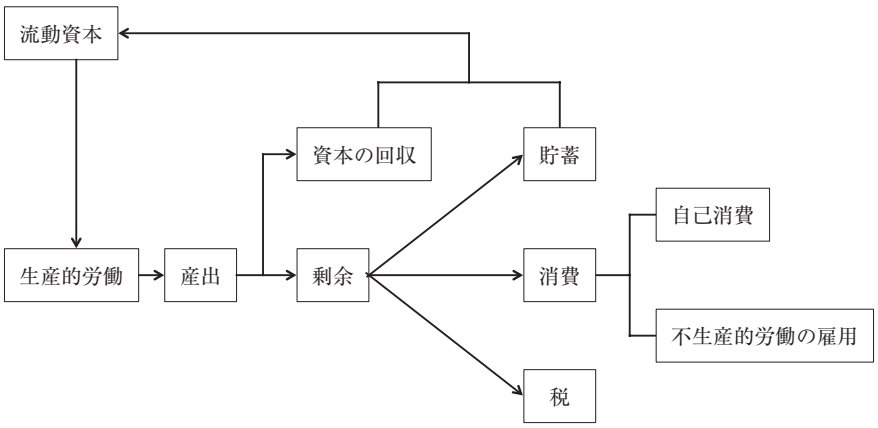
生産的労働ではなく倹約が，資本の増加をもたらす直接の要因である。確かに倹約によって蓄積されるものを生み出すのは生産的労働である。しかし，生産的労働によって何が獲得されても，倹約によって貯蓄され蓄積されなければ，資本が増加することはない。

倹約によって，生産的労働者の維持に使われる資金が増え，生産的労働者が増加し，その労働によって，労働対象の価値が高まる。このため倹約は，その国で土地と労働による年間生産物の交換価値を増やす要因になる。生産的労働の量が増えるので，年間生産物の価値が高まる。

Smith（1776）／山岡訳（2007）『国富論』上巻345-346頁

こうしたロジックを辿った末に，スミスは，「浪費家はみな社会の敵であり，倹約家はみな社

図表２　スミスの資本蓄積の仕組み



（出所）堂目卓生（2008）『アダム・スミス』187頁

会の恩人だといえるだろう」に達する。

このような考えを持つスミスにとって，マンデヴィルの言うように，

悪徳は国家にとり不可欠なものだ
美徳だけで国民の生活を壮大にできない
黄金時代をよみがえらせたい者は
正直と同じようにドングリにたいしても
自由にふるまわなければならない

という言葉は，受け入れがたいものであったであろう。そして先に触れたように，スミスは，「家を斉えるさいの思慮分別が，一大王国を治める場面では愚行となる。まさかこんなこと，ありうるわけもなかろう[11]」という，マンデヴィルに対する反論の言葉を『国富論』に書き込むことになるのである。

スミスの反マンデヴィル観は，スミスの師であるフランシス・ハスチンの影響を受けていることは知られている[12]。スミスが，ハスチンの後を継いでグラスゴーで道徳哲学の講義をはじめた際には，ハスチンの『道徳哲学大系』を参考にして講義をすすめていた。この『大系』には，「贅沢や不摂生は大きな消費の原因となり，労働と製造業を奨励するから一国の富にとって必要だ」と強弁するのは空虚な話だとある。これは，あきらかにマンデヴィルを意識した言葉であった。ハスチンの師筋のシャフツベリー卿は，マンデヴィルと同時代にマンデヴィル自身と思想的に真っ向対立していた（『蜂の寓話』第２部に登場する性善説を信じるホレイショはシャフツベリー卿）。このシャフツベリー卿が，倹約を基礎に置く経済学思想の源流におり，シャフツベリー卿の家庭教師にジョン・ロックがいた。

スミスとマルサス

国富のダイナミズムに対する考え方，すなわちスミスの成長論には，倹約家が貯蓄をし，その貯蓄が投資に回って，資本蓄積が進んで生産性が高まる，その結果，国富を表す生活の必需品（necessaries）と便宜品（conveniences）が増加するという考えが根底にある。

生産的労働ではなく倹約が，資本の増加をもたらす直接の要因である。確かに倹約によっ

11）Smith（1776）／山岡訳（2007）『国富論』下巻32頁
12）関岡正弘（1995）の『日本経済新聞』1995年３月１日からのやさしい経済学「マンデヴィルと経済学の源流」は，ロック，シャフツベリー，ハスチン，スミスへの思想の流れ，および，スミスが貨幣経済を視野に入れなかったゆえの欠陥が，現代の経済学にも引き継がれており，経済学が危機的状況にあることを，的確に要約している。

て蓄積されるものを生み出すのは生産的労働である。しかし，生産的労働によって何が獲得されても，倹約によって貯蓄され蓄積されなければ，資本が増加することはない。

Smith（1776）／山岡訳（2007）『国富論』上巻346頁

こうした考え方の根底にあるのは，生産性が高まって増加した生産物，つまり必需品や便宜品は，生産されれば必ず売れるという信念である。この考えを継承したのが，フランスのセイであり，イギリスのリカードであった。

セイは，後に，セイの法則と呼ばれるようになる，次のような言葉を残している。

- 国（国家の経済）は，支払いうるだけの販路を提供するのであって，より多くの支払いは，追加的な生産品に対して行われるのである。
- 貨幣は相互の交換を一度に行うための仮の穴埋めであって，交換が終わってみれば生産品に対しては生産品が支払われている。

ジャン＝バティスト・セイ（1803）『政治経済学概論』第一巻第二十二章「販路」

Wikipedia「セイの法則」より

上記のうち，はじめの文が，後に，セイの法則「供給はそれ自らの需要を作る」と呼ばれるようになり[13]，二つ目の文は，セイの法則と一対となる新古典派の貨幣ヴェール論である。

しかしながら，果たして，セイの法則は，本当に成立するのか？

セイの法則に異論を唱えたのが，マルサスであった。彼は，セイの法則が成立しないことを念頭に置きながら，スミスの経済観に反論する。

アダム・スミスは，資本は節約（parsimony）によって増加し，すべてのつつましい人は社会の恩人（public benefactor）である……と述べている。……貯蓄の原理は，過度にわたるときには，生産への誘因を破壊し去るであろうことは，まったく明らかである。もしすべての人がもっとも簡単な食物，もっとも貧弱な衣服，およびもっともみすぼらしい家屋で満足しているとするならば，そのほかの種類の食物，衣服および住居が存在しなかったであろう，ということはたしかである。……この両極端は明らかである。……生産力と消費への意志との双方を考慮に入れた場合に，富の増加への刺戟が最大になる中間点（intermediate point）がなければならない，という結論となる。

Malthus（1820）／小林時三郎訳（1968）『経済学原理』26-27頁

マルサスのこの文章は，およそ100年後に，ケインズが人物評伝「マルサス」で引用し，その

13）「供給はそれ自らの需要を作る」という文言については，ポール・デヴィッドソンによれば，セイのオリジナルではなく，1803年にイギリスの経済学者ジェームズ・ミルがセイの著作を翻訳する際にそのような要約が登場したとのことである。

後，1936年の『一般理論』で再度紹介している箇所である。マルサスは，50歳代に入った後期においては，「彼（マルサス）が――決して十分明確にではないが――「有効需要」という言葉[14]」を用いて，アダム・スミスの資本蓄積論に反論をしていた。そしてスミスの資本蓄積論を成立させる条件としての「セイの法則」を否定し，この法則を唱えるセイとリカードと論争を行っていた。結果は，

> 勝利を占めたのはより魅惑的なリカードの知的構成物であり，しかもリカードは，マルサスの着想に完全に背を向けることによって，まるまる100年の間，経済学の主題を作為的な軌道に閉じ込めることになったのである。
>
> Keynes（1933a）／大内忠男訳（1980）『人物評伝』119頁

これに嘆くケインズは，次のように言う。

> もしかりにリカードではなくマルサスが，19世紀の経済学がそこから発した根幹をなしてさえいたならば，今日世界はなんとはるかに賢明な，富裕な場所になっていたことであろうか！いかなるときにも常に明々白々であったはずのものを，われわれは苦労して再発見し，われわれの誤った教育からくるおおいを突き破らなくてならないのである。私は長らく，ロバート・マルサスをケンブリッジ経済学者の始祖だと主張してきた。[15]
>
> Keynes（1933a）／大内訳（1980）『人物評伝』136-137頁

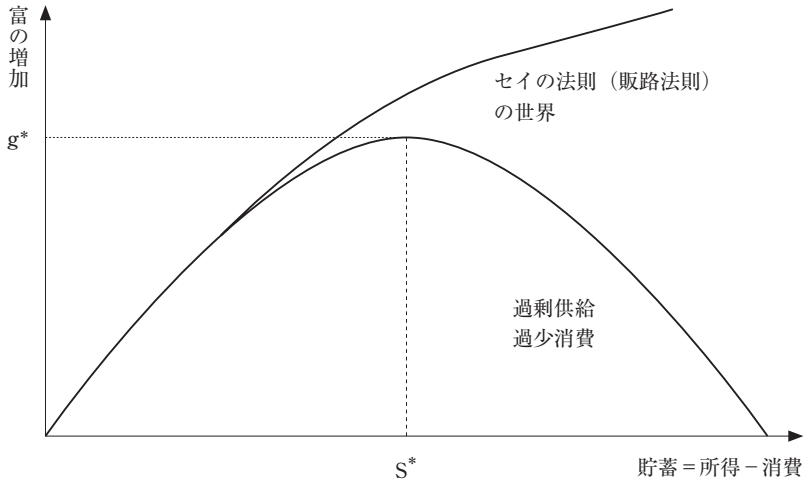
現在を生きるわれわれ，すなわち新古典派経済学が社会経済政策への際だった影響力を持つ状況を目の前にみてきたわれわれも，今まさに「いかなるときにも常に明々白々であったはずのものを，われわれは苦労して再発見し，われわれの誤った教育からくるおおいを突き破らなくてならない」状況にある。ゆえに，本稿のような文章を書く必要が生まれているのであるが……。

さて，マルサスが説いたのは，彼と同時代を生きていたセイやリカードが主張した「供給はそれ自らの需要を作る」という販路法則（the law of outlet），通称，セイの法則を否定して，経済は，生産された財・サービスをさばくことができない状態，つまり，一般的過剰供給（universal glut）に陥る可能性あり，経済規模は，生産力ではなく有効需要によって決まるということであった。この考えは，セイの法則を信奉するセイやリカードに「完全に背を向け」られ，過剰供給論は，

14）Keynes（1933）／大内忠男訳（1980）『人物評伝』119頁

15）ケインズのマルサス評伝の一番早い草稿は1922年の日付である。しかし，「編集注」によれば，1933年の『人物評伝』までには，幾度となく挿入と削除が行われており，「これらすべての変更の日付を確実に定めることは不可能である」とのこと。ただし，本稿で引用した「もしかりにリカードではなくマルサスが……」の段落については，「編集注」には，「マルサスとリカードに関する議論が，この論点についての彼自身の考えがすでに最終的な形態を取り始めていた，1933年の初頭に属するものであることは，ありそうに思われる（序文は1933年２月の日付になっている）」〔Keynes（1933a）／大内訳（1980）『人物評伝』96頁〕と記されている。

図表 3　有効需要理論に基づく過少消費論とセイの法則の世界



19世紀前期の経済学――貨幣の経済特性には考えが及ばなかった19世紀の経済学――の主流からは消え去っていく。そして，およそ100年の後に，マルサスの有効需要理論に基づく一般的過剰供給論を，流動性選好という利子理論，貨幣理論を基礎に据えた有効需要理論に基づく過少消費論として復活させたのが，ケインズだった。

先に引用したマルサスの「生産力と消費への意志との双方を考慮に入れた場合に，富の増加への刺戟が最大になる中間点（intermediate point）がなければならない，という結論となる」という論，およびマルサスを批判するセイとリカードの論は，図表 3 に要約できよう。

マルサスは，セイの法則を否定して，経済は，生産された財・サービスをさばくことができない状態，つまり，一般的過剰供給（universal glut），逆に言えば過少消費に陥る可能性があり，経済規模は，生産力ではなく有効需要によって決まることを説いた。

こうした考え方の萌芽は，マルサスの『経済学原理』の次の文に最初に出てくる――そして有効需要の論が芽生えた意識の中では，スミスの言う「非生産的労働」（unproductive labour）に対しても，マルサスにより異論が唱えられることになる。

> もし個人的サービスを富と呼ぶにあたって，生産されるもの自体の性質にわれわれが目を向けないで，それとは別の富を刺激するためにそれと交換にうけとられる支払いの結果だけに注意するならば，それは，富の直接の生産とは何の関係もない新しい別個の考え方を持ち出すことである。
>
> このような見解においては，わたしがアダム・スミスの不（ママ）生産的労働者をきわめて重くみていることになるであろう。しかしこれは明らかに，生産者としてではなく，彼らのうけとる支払いに比例して需要を創出するというかれらの能力によって他人の生産を刺激するものとしてである。
>
> Malthus（1820）／小林訳（1968）『経済学原理』67頁

こうしたマルサスの論は，リカードの次のような考えを意識して書かれたものであった。

> 生産物はつねに生産物によって，または勤労によって購買される。貨幣はただ交換を行わせるための媒介物であるにすぎない。ある特定の商品があまりに多く生産されて，その商品に支出された資本を償わないほどの供給過剰が市場で起こることがあるかもしれない。しかし，こういうことは全商品については起こりえない。
>
> Ricardo（1817）／羽鳥卓也・吉澤芳樹訳（1987）
> 『経済学および課税の原理』下巻113-114頁

リカードは，貨幣が介在しない物々交換社会における貨幣ヴェール観，その帰結としてセイの法則をもってして，マルサスの過剰生産論に反論を加える―― Malthus（1820）の出版後，リカードは Malthus（1820）批判のメモ「マルサス評注」を残しており，それは1919年にリカードの曾孫によって発見され，1928年に公刊された。

付け加えれば，リカードたちの物々交換社会経済の想定は，セイやリカードの論，そしてスミスの論で重要な意味をもっている，消費の魅力が衰えることがない前提，すなわち，貨幣の保蔵という消費のライバルが人びとの中で意識され，人は，金銭欲と物欲の間の選択を強いられるようになる状況を無視した前提から導き出されている。すなわち，

> アダム・スミスが次のように述べたのは，正しい。「食物の欲望は，誰の場合にも人間の胃の腑の狭い容量によって制限されている。けれども，建物，衣服，馬車および家具といった便宜品や装飾品の欲望にはなんらの制限も一定の限界もないようである」と。そうだとすると，自然はある一定の時点に，農業で有利に使用することができる資本量を必ず制限してはいるが，生活の「便宜品および装飾品」の取得に使用することができる資本量にはなんらかの制限を設けていない。これらの欲望を充たす物を最も豊富に取得することが，意図されている目的である。
>
> Ricardo（1817）／羽鳥・吉澤訳（1987）
> 『経済学および課税の原理』下巻115-116頁

経済学は，残念ながら，マルサスに対するリカード，セイ連合の圧倒的勝利となって，100年を経ることになる。

100年の後に，ケインズが，まだ，1930年の『貨幣論』から1936年『一般理論』への脱皮の過程にあった1933年に，まさに物々交換社会を想定した先人たちの経済学を，次のように評すことになる。

> 貨幣は使用してはいるが，実物財や実物資産の取引を結ぶ単なる中立的な連鎖（link）としてのみ使用し，貨幣が動機や意思決定に影響することを認めない経済は，よい名称はな

いので，実物交換経済（real-exchange economy）とでもよんでおこう。私が切望する理論は，こうした経済を否定して，貨幣がそれ自らの役割を演じ，動機や意思決定に影響を及ぼすのである。端的にいうと，貨幣が状況に影響を及ぼす要因となっている経済であり，はじめの状態と終わりの状態との間での貨幣の働きにかんする知識なくしては，長期あるいは短期のいずれにおいても，事態のなりゆきは予測され得ないのである。そしてわれわれが貨幣経済（monetary economy）について語るときに意味すべきは，まさにこのことである。……

……好況と不況は，ここで正確には定義はしないけれどもある重要な意味において，貨幣が中立的でない経済に特有の現象なのである。

したがって，私が次に取り組むべき課題は，そうした生産の貨幣理論（monetary theory of production）を詳細に作り上げることになると信じている。とにかくそれこそ，私が今，自分の時間を浪費していないという確信をもって没頭している課題である。

Keynes（1933）, *The Collected Writings of John Maynard Keynes, Volume XIII*, pp. 408-411.

ママリー，ホブソンとケインズ

ケインズが，図表１における左側の経済学者として，時代的にマルサスの次に認めたのはホブソンとママリーである。

マルサスの理論は論争の表舞台からあとかたもなく消え失せた。……過少消費論は冬眠状態にあった。だが，1889年に至るや，J・A・ホブソンとA・F・マム（ママ）マリー（Mummery）の『産業の生理学』が忽然と世に現れた。

Keynes（1936）／間宮訳（2008）『一般理論』下巻164頁

ママリーは，実業家であり登山家であり冒険家であり，ホブソンは，ひょんなことからママリーに出会うのであるが，その経緯をホブソンは次のように回顧している。

私はマメ（ママ）リー（Mummery）という一人の実業家と知り合うようになった。彼は当時からマッターホルンの新登攀路を開拓した大登山家として知られ[16]，1895年に有名なヒマラヤ山脈ナンガ・パルバットの試登中に遭難死した。

Hobson（1938）／高橋哲雄訳（1983）『異端の経済学者の告白』27頁

ここでママリーの話に戻れば，彼は，1895年６月，39歳で『アルプス・コーカサス登攀記』を出す。出版から１週間後……

ここからは，ママリーの妻，メアリ・ママリーの文章を借りよう。

本書の出版から一週間後に，夫はヘイスティングス氏とノーマン・コリー氏を伴い，ヒマラヤ登山を目指してインドへ旅立っていったのです。

Mummery（1908）〔初版1895〕／海津正彦訳（2007）
『アルプス・コーカサス登攀記』334頁

旅先で，ママリーは遭難し，メアリのもとに戻ってくることはなかった。

『アルプス・コーカサス登攀記』の第２版が出された1908年，ホブソンは序文「ママリー頌」を書くことになる。その序文には，『産業の生理学』を書くことになる経緯が述べられている。

はじめて彼の存在を知ったのは，私たちの共通の友人にこう言われた時のことだった――知り合いに頑固一徹なビジネスマンがいて，その男は自分の商売をつづけているうちに，消費と貯蓄について型破りな理論を編み出し，それについて誰かと議論したがっている，と。それから１，２年，私たちは書簡の遣り取りを中心に，たまに顔を合わせながら問題点の検討を繰り返すようになり，そのうちに，彼の粘り強い説得と巧みな立論のおかげで，私が事前に呈した反論はことごとく押さえ込まれてしまった。

その時から，私たちは緊密に協力し合って，私たちが新機軸と判断する「現代の工業システムにおける生産と消費の相関関係」に関する諸説を発展させていった。その一部には，消費過少＝貯蓄過剰が失業をもたらし，ひいては商業不信の主要因となるという分析をも

16）ママリーが，マッターホルンのツムット山稜を初登頂したのは，1879年９月３日，ママリー23歳の時。そのツムット山稜とは，マッターホルン北壁の右側の稜線。

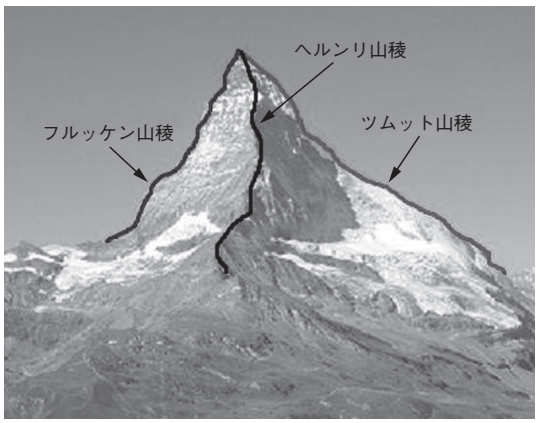


Photo by Y. Kenjoh

ママリーは，翌1880年７月19日に，イタリア側からのフルッケン山稜からの初登頂にも成功している。

ちなみに，ヘルンリ山稜からの初登頂は，1865年７月13日に，ウィンパー一行が成功――初登頂者７人のうち４人が下山時に遭難しているから成功といえるかどうかは微妙ではあるが。まとめれば，こうなる。

1865年７月13日	ウィンパー（25歳）	ヘルンリ山稜
1879年９月３日	ママリー（23歳）	ツムット山稜
1880年７月19日	ママリー（24歳）	フルッケン山稜

含んでいた。

Mummery（1908）〔初版1895〕／海津訳（2007）
『アルプス・コーカサス登攀記』3頁

ママリーは，当時の伝統的経済学の教えるセイの法則を受け入れることができなかった。しかしホブソンは，なお，伝統的経済学の世界にいた。このあたりのことは，ホブソンの自伝が語ってくれている。

この人物が過剰貯蓄にかんする議論で私を混乱に陥れた――彼はそれが不況期の資本と労働の過少雇用の原因だとしたのである。長い間私は正統派経済学の武器を使って彼の議論を反駁しようと試みた。しかし，ついに彼は私を説得し切り，私は彼に協力して過剰貯蓄論を精密化し，それは『産業の生理学』という題で1889年に公刊された。

Hobson（1938）／高橋訳（1983）『異端の経済学者の告白』27頁

『産業の生理学』には，後にケインズが理論化していくことになる内容がふんだんに盛り込まれている。

貯蓄は個人のみか社会をも裕福にし，そして支出は貧しくする。貯蓄の一般論を言えば，健全なる貨幣愛はあらゆる経済的善の根本，ということになろう。それは節倹的な人を豊かにするばかりか，賃金の原資となり，失業者に職を与え，いろんな方面に恩恵を施す。毎日の新聞から最新の経済学の専門書に至るまで，説教壇から議会の下院に至るまで，〔ページを繰っても，口を開いても〕この結論が再論再述されるものだから，最後にはそれに疑問を抱くのは確信犯的不信心者と思われて来る。……

……われわれの目的は，このような結論は支持し難いこと，貯蓄習慣はいくらでも励行しうるが，貯蓄習慣のこのような過度の励行は社会を貧しくし，労働者から職を奪い，賃金を切り下げ，不景気として知られる陰気と沈鬱を経済界に蔓延させること，これを示すことである。[17)]

Mummery and Hobson（1889）, *Physiology of Industry*, pp. iii–v.

ある社会の資本を有利に増やすことが可能となるには，それに続く消費の増加がなければならないのは明らかである。……貯蓄が増加し資本が増加すると，その増加を有効にするために，将来直ちに，それに見合った消費の増加がなければならない。……将来の消費というときの将来とは，10年先，20年先，あるいは50年先の将来ということではなく，現在からはほんのわずかしか隔たっていない将来のことである。……節倹と慎重さが高じて

17） 邦訳は，Keynes（1936）／間宮訳（2008）『一般理論』下巻168–167頁による。

現在における貯蓄欲求が高まれば，彼らは将来の消費を増やすことをうべなわなければならない。……現在の消費率に見合う商品を供給するための資本量は決まっており，それを上回る量の資本は生産過程のいかなる点においても経済性をもちえない。……現在のたいていの経済学者は消費が不足する場合のあることを否定している。……社会をこのような〔貯蓄の〕超過状態に至らしめる経済的な力の作用をわれわれは見出すことができるだろうか。仮にこのような諸力があるとした場合，経済メカニズムの中に〔超過貯蓄を制する〕有効な抑止力は存在しないのだろうか。……第１に，高度に組織化された産業社会ではどこでも，過剰貯蓄を自然と引き起こす力が恒常的にはたらいているということ，第２に，経済メカニズムの中に存在するとされる抑止力は全く作用しないか，さもなければ重大な経済的害悪を阻止するには不十分であるということ，これらは明らかであろう。……マルサスとチャルマーズの主張に対してリカードが与えた短い回答を後生のたいていの経済学者は文句なしに受け入れてきたように思われる。「生産物はいつでも生産物あるいはサービスによって購われる。貨幣は交換を実行するための媒体にすぎない。それゆえ，生産が増えると必ずそれに応じて生産物を獲得し消費するための能力も高まるのであって，過剰生産というものは存在するわけがない。[18]

Mummery and Hobson（1889）, *Physiology of Industry*, pp. 100–101.

もっとも，ホブソンが，ママリーの誘いに応じて，異端の世界に足を踏み入れたとき，相応の代償を社会から求められることになった。

これは私の異端の生涯の最初の公然たる一歩であって，私はその重大な結果をまるで理解していなかったのである。というのは，まさに私は（パブリック・スクールの）教職をすでに辞めていて，大学の公開講座の経済学と文学の講師としてのあたらしい方面の仕事に進もうとしていたほどなのだから。最初のショックはロンドン公開講座委員会が私に政治経済学の講座の提供を認めないというかたちで訪れた。のちに知ったことだが，これはある経済学の教授の介入によるものであり，かれは私の本を読んでそれが理性の働きにおいて地球が平面であることを証明しようという企てにひとしいと考えたのである。

Hobson（1938）／高橋訳（1983）『異端の経済学者の告白』27–28頁

この「ある経済学教授」が，『数理心理学』を書いて契約曲線やエジワース・ボックスを説いたエジワースである――図表１にはホブソンの右側に描いている。そして，正統派経済学者たちによる，アカデミズム界からのホブソンの追放は徹底していたようで，ホブソンは，大学における非常勤の小さな講座からも永久に閉め出され，その後半生を，ジャーナリストとして生きて行くことになる。それほどまでに過少消費論というのは，正統派経済学，および正統派経済学の思

18）　邦訳は，Keynes（1936）／間宮訳（2008）『一般理論』下巻173–174頁による。

想性と軌を一にしていたヴィクトリア女王期の通念に反したものであった。

そして，このホブソンを，彼よりも25歳年下のケインズが，経済学の表舞台に立たせることになる。

ホブソンは，最晩年――80歳で他界する２年前の1938年に，自伝『異端の経済学者の告白』を出す。それは，ケインズが1936年に『一般理論』を出した２年後のこと。その自伝で，ホブソンは，ケインズに触れている。

> J. M. ケインズ氏は私の分析に完全に同意したわけではないが，私の初期の形態の過剰貯蓄の異端説に惜しみない賛辞を送（ママ）ってくれ，アメリカではブルッキンズ研究所の刊行物が国民所得の分配と国民消費率の関係を突っ込んで調査し，そこに循環的不況の起因を発見している。
>
> Hobson（1938）／高橋訳（1983）『異端の経済学者の告白』174頁

エジワースをはじめとした正統派経済学者たちにより，アカデミズムの世界から追放されたホブソン――その人生の最晩年に，ケインズから惜しみない賛辞が贈られるというわけである。

もっとも，ケインズが，『一般理論』執筆中にリチャード・カーンに宛てた手紙にあるように，ケインズはホブソンというよりも，ママリーを人物として認めていたようである。

> 1935年７月30日　ケインズからカーンへの手紙
> ママリーに関して労をとってくれてありがとう。ホブソンはママリーを十分に理解していなかったね。ママリーが死んでから，道を外してしまったみたいだ。しかし，ホブソンがママリーを助けて書いた『産業の生理学』はすばらしい作品だ。私は，この本について詳細に述べようと思う。しかし，老ホブソンは，あまりにも不当な扱いを受けてきたから，私はママリーの功績が際立っているということには触れないつもりでいる。
>
> Keynes（1935）, *The Collected Writings of John Maynard Keynes, Volume XIII*, p. 634.

（続く）

参　考　文　献

Franklin, Benjamin（1771）, *Benjamin Franklin's Autobiographical Writings*／渡辺利雄訳（1980）「フランクリン　自伝」松本重治責任編集（1980）『世界の名著40　フランクリン，ジェファソン，マディソン，トクヴィル』中央公論社

Galbraith, John Kenneth（1976〔1st ed. 1958〕）, *The Affluent Society*, 3rd ed., Houghton Mifflin Co.／鈴木哲太郎訳（1980）『ガルブレイス著作集２　ゆたかな社会・大衆的貧困の本質』TBS ブリタニカ

Hayek, F. A.（1966）, "Dr. Bernard Mandeville"／田中真晴・田中秀夫訳（1986）『市場・知識・自由』に所収，ミ

ネルヴァ書房
Hobson, John Atkinson（1938）, *Confessions of an Economic Heretic*, George Allen & Unwin Ltd.／高橋哲雄訳（1983）『異端の経済学者の告白』新評論
Keynes, John Maynard（1933a）, “Thomas Robert Malthus,” *The Collected Writings of John Maynard Keynes, Volume X, Essays in Biography*（1972）, Macmillan／大内忠男訳（1980）『ケインズ全集第10巻　人物評伝』東洋経済新報社
――――（1933b）,“A Monetary Theory of Production,” *The Collected Writings of John Maynard Keynes, Volume XIII, The General Theory and After Part I Preparation*（1973）, 408–411, Macmillan.
――――（1935）,“From a letter to R. F. Kahn, 30 July 1935,” *The Collected Writings of John Maynard Keynes, Volume XIII , The General Theory and After Part I Preparation*（1973）, 408–411, Macmillan.
――――（1936）, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Macmillan／間宮陽介訳（2008）『雇用，利子および貨幣の一般理論　上下巻』岩波書店
Malthus, Thomas Robert（1820）, *Principles of Political Economy Considered with a View to their Practical Application*, John Murray／小林時三郎訳（1968）『マルサス　経済学原理　上下巻』岩波書店
Mandeville, Bernard（1714）, *The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits*／泉谷治訳（1985）『蜂の寓話――私悪すなわち公益』法政大学出版局
Mummery, Albert. F.（1908〔1st ed. 1895〕）, *My Climbs in the Alps and Caucasus*, 2nd ed.／海津正彦訳（2007）『アルプス・コーカサス登攀記』東京新聞出版局
Mummery, Albert. F. and John A. Hobson（1889）, *Physiology of Industry: Being an Exposure of Certain Fallacies in Exiting Theories of Economics*, Kelley & Millman, Inc.（1956）.
Ricardo, David（1817）, *On the Principles of Political Economy, and Taxation*／羽鳥卓也・吉澤芳樹訳（1987）『経済学および課税の原理　上下巻』岩波書店〔ただし，翻訳は第２版（1819）に基づいている〕
Smith, Adam（1759）, *The Theory of Moral Sentiments*／水田洋訳（2003）『道徳感情論　上下巻』岩波書店
――――（1776）, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*／山岡洋一訳（2007）『国富論――国の豊かさの本質と原因についての研究　上下巻』日本経済新聞出版社
上田辰之助（1987〔底本（1950）〕）『上田辰之助著作集　4　蜂の寓話――自由主義経済の根底にあるもの』みすず書房〔著作集所収の底本は上田辰之助（1950）『蜂の寓話――自由主義経済の根底にあるもの』新紀元社〕
権丈善一（2011）「合成の誤謬考――企業の利潤極大化と社会の付加価値極大化は大いに異なる」『生産性新聞』2011年10月25日
――――（2012）「医療保障政策と医療団体の政治経済学的位置」『日本医師会　平成23・24年度　医療政策会議報告書』
関岡正弘（1995）「やさしい経済学　マンデヴィルと経済学の源流」『日本経済新聞』1995年３月１日～３月７日計６回
堂目卓生（2008）『アダム・スミス――『道徳感情論』と『国富論』の世界』中公新書